初期近代英詩における錬金術（中編）

松本　舞*

Mai MATSUMOTO

Alchemy in Early Modern England, Part 2

要　　旨

前編では、まず、初期近代の英国詩人たちの表現を、錬金術の理論と照合させながら確認していった。錬金術によって取り出される第五元素の効果は、1650年代の錬金術復興運動の時期を経て変化していったこと、死からの復活を可能にするものとして錬金術が描かれていることに注目した。

本編では、トマス・ロッジの「錬金術の解剖」やエイブラハム・カウリーの「オード」の中で描かれる、錬金術師の表現をみていく。また、ベン・ジョンソンの戯曲『錬金術師』の中の錬金術の実験の行程や、錬金術をとりまく人々の描写を検証する。

また、後編では、終末思想と錬金術の関係を明らかにしながら、ヘンリー・ヴォーンの詩の中の実践的錬金術の描写を清教徒の「新たなる光」（‘New Light’）の概念に対する批判の視点から考察したいと考えている。

【キーワード：錬金術師 , 錬金術の実験 , 聖書と錬金術 , 伝染病の治療 , 清教徒】

1．序

錬金術師たちが探し続けても賢者の石やエリクシルが見つからない様子は滑稽に描かれ、彼らの過ちや黄金錬成に失敗する様子は、錬金術の文献の中でも、詩作品のなかでも批難の対象になる。ジェフリー・チョーサー（Geoeffrey Chaucer, ca.1343-1400）の『カンタベリー物語』（*The Cantebury Tales*）に収録されている、「錬金術の師弟の話」（‘The Canon’s Yeoman’s Tale’）の中で、賢者の石は次のように語られる。

> A！nay！ lat be; the philosophres stoon,
> Elixer clept, we sechen faste echoon;
> For hadde we hym, thanne were we siker ynow.
> But unto God of hevene I make avow,
> For al oure craft, whan we han al ydo,
> And al oure sleighte, he wol nat come us to.
> (ll.862-867) [1]

弟子は、いくらこの石を探しても一向に表れないこと、そして一度この石を探そうと試みると、「永久に探さねばならない」（‘it is to seken evere’, l. 874）ことを警告している。

錬金術師たちの失敗談は、決して到達することができない試みと重ねて描かれる。例えば、ウィリアム・カートライト（William Cartwright, 1611-1643）の「ノープラトニックラブ」（‘No Platonic Love’）と題された次の詩の中では、精神的な愛に到達できない話者の思いが、錬金術の失敗に喩えられている。

> Come, I will undeceive thee, they that tread
> Those vain aerial ways
> Are like young heirs and alchemists misled
> To waste their wealth and days;
> For searching thus to be for ever rich,
> They only find a med’cine for the itch. (ll.19-24) [2]

ここでは、若い相続人が財産を浪費する虚しさと、錬金術師が日々の時間を、そして富を浪費してしまうことが並列関係に置かれている。彼らが手に入れるのは一時的に「痒みを麻痺させる程度の薬」（‘a med’cine for the itch’）であり、富も薬も生み出すことはない。この詩は、プラトニック・ラブが現実では決して成し得ないものである証拠として、錬金術師たちが薬も黄金も決して作り得ないことが挙げられている。

錬金術師たちがエリクシルを追い求める姿の愚かさは、トマス・ロッジ（Thomas Lodge, c.1558-1625）の「錬金術の解剖」（‘The Anatomie of Alchemie’）と題された詩の中にも見ることができる。[3] ロッジは錬金術師たちを「労働に疲れた男たち」（‘labour-tyred men’, l. 20）と表現し、また、錬金術そのものを「愚かな革新」（‘foolish innovation’, l. 7）「自然の力の迫害」（‘persecution of

* 島根大学教育学部言語文化教育講座

natures power', l. 10）と揶揄する。更に、錬金術師たちの目的は、「耳によって」第五元素を得るのだと描写される。

Their purpose is to drag out by the ears
A quintessence to fixe and fashion gold,
To cloth decrepit age with youthly years
To quicken plants by nature fruitless old,
But al these promis'd mountains prove a mouse
These silly idiots pile the fire so fast [.] (ll.21-26)

錬金術師たちは黄金を錬成し、不老不死を可能にし、枯れた植物の再生を可能にすると吹聴しているが、それは見せかけに過ぎず、老いの年月に若さの時期という衣を着せている。ロッジが「耳によって」（'by the ears'）と言っているのは、エリクシルもしくは賢者の石を手に入れたと吹聴してまわる詐欺師の口達者な様子を示すものとなっている。以下の表現では、錬金術師たちが言葉巧みに人々を騙し、金銭を手に入れる様子が描かれている。

And both their welths, & wits fortunes wast:
Yet these quark-salvers for a colour sake
Pretend some physical experiments,
And mightie cures with boldness undertake,
But all their science is but complements:
They by their words enritch believing sots,
Whereas in deede they emptie all their chifts,
And where they promise gold, by glutting pots,
They beg for groats, and part with empty fits [.]
……
Alas, alas, how vanitie hath power
To draw mens minds from virtue, under hope
Of fading treasures ? [.] (ll.28-36, 85-87)

彼らの作業は「何らかの化学の実験をやっている振り」にすぎず、「あつかましさで力強い治癒力を保証する」とも揶揄される。そして「彼らの化学はすべて」であるが、人々を騙し、そこで黄金を約束し、小銭を無心し、空虚な爆発（'empty fits'）を残して去ってゆく。そしてロッジは「消えゆく財宝の下」では「人間の精神を美徳から引き離す」ために如何に「虚栄」が何の力を持っているか、と嘆いている。

エイブラハム・カウリー（Abraham Cowley, 1618-1667）の「オード5」（'Ode V: In Commendation of the Time We Live under, the Reign of Our Precious King Charles'）と題された詩の中の以下の表現は、錬金術師たちが失敗を繰り返すことを非難しながらも、チャールズは「鉄」の時代から「黄金」の時代へ変えることができる錬金術師に喩えられている。

Where, dreaming Chymics, is your pain and cost ?
How is your oil, how is your labour lost ?
Our Charles, blest alchemist (though strange,
Believe it, future times), did change
The iron age old
Into an age of gold. (ll. 32-37) [4]

カウリーは、チャールズのことを「祝福された錬金術師」（'blest alchemist'）とよび、賛美している。ここでカウリーは、チャールズ一世が時代を錬成する技を持っていることを描き出している。リンデンとマックス=ウェル・スチュワートはこの詩の32-37行を引用し、錬金術を肯定的に利用する例として挙げている（Linden, p.169、Maxwell-Stuart, p.118）。しかしカウリーの意図はむしろ、この詩の冒頭の以下の表現にあるのではないだろうか。

Curst be that wretch (Death's factor sure) who brought
Dire swords into the peaceful world, and thought
Smith (who before could only make
The spade, the plough-share, and the rake)
Arts, in most cruel wise
Man's life t'eptiomize !

Then men (found men, alas !) ride post to th'grave,
And cut those threads which yet the Fates would save;
Then Charon sweated at his trade,
And had a larger ferry made;
Then, then the silver hair,
Frequent before, grew rare.

Then Revenge, married to Ambition,
Begat black War [.] (ll.1-14)

ここでの「技」（'Arts'）とは、明示されてはいないが、「あの恥知らずの者」（'that wretch'）が「平和な世界」に「剣」を持ち込み、さらに「鋤」や「犂」、「熊手」といったものしか作れなかった「鍛冶屋」にその「技」を教えたことが批判されている。この詩の終結部が錬金術のイメージで結ばれていることを考慮に入れてこの第一連を読み返すと、卑金属である農具が、「剣」に錬成されたことによって、さらに言えば、一種の錬金術によってこの世に戦争がもたらされ、「運命の女神」（'Fate'）でさえ取っておいた「糸」を切り、人間を死へと導くことになってしまったと読み返すことができる。この詩は18-23行で、「どのような平野が、川が血の中で戦争の物語をみられなかったことがないだろうか」と描かれ、また、続く24-29行では、正しきチャールズは鉄の怒りに沈黙していなかったこと、またチャールズの治世が来る前では誰も不幸なまま生まれてはこなかったことが語られる。この詩が書かれたのが市民戦争の混乱期であることを合わせて考えると、清教徒をはじめとする市民階級の人々がチャールズ一世を断頭台に送ったのは、鍛冶屋が「技」（'Arts'）を教わり、一種の錬金術を成し遂げ、農具を武具へと変えてしまったからである、と読むことができる。

ベン・ジョンソン（Ben Jonson, 1572-1637）は、「錬金術師に」（‘To Alchemist’）と題された詩の中で、「もしもお前たちの誇ることが自分たちの偉大な技が真実だというだけならば、確かに、自発的な貧困が最も多くお前たちの中に宿るということは確実だ」（‘If all you boast of your great art be true; / Sure, willing poverty lives most in you’, ll.1-2）と言っているが、錬金術師に対する皮肉は、戯曲『錬金術師』の中で、以上で述べたような典型的な特徴として、描かれている。戯曲の中では、錬金術の博士と偽って人々を欺く、サトル（Subtle）を一種の詐欺師として登場させる。また、狂信的な清教徒の一派に属する牧師、トリビュレーション（Tribulation）と彼に仕える執事アナナイアス（Ananaias）が「宗教的熱狂」（‘zeal’）を唱えている姿も併せて描かれている。本論は、『錬金術師』の表現をみながら、17世紀の錬金術師たちと彼らをめぐる人々がどのように位置付けられていたか、再確認することにしたい。

2．贋金の鋳造と錬金術奥義の秘匿

この戯曲は、ペストの流行により、一家の主がロンドンを逃げ出し、残る召使が詐欺師を家に招き入れ、錬金術の実験などを行わせるという設定になっている。[5] 家の中にあるすべての金属、またロンドンの金物屋の金属、ローズベリーの銅などすべてを金に変えてみせようと、マモンは豪語する（第二幕第一場）。また、マモンは、デヴォンシャーやコーンウォールそのものを黄金の国にかえてしまおう、と次のように言う。

MAM.
Yes, and I'll purchase Devonshire and Cornwall,
And make them perfect Indies! you admire now?
（Act II. Scene I, ll. 35-36）

ここでは、鉱山から得た金属を、錬金術師たちは黄金に変えようと試みていたことを意味する。また、マモンは賢者の石の効力を次のように説明する。

MAM.
But when you see th'effects of the Great Medicine,
Of which one part projected on a hundred
Of Mercury, or Venus, or the moon,
Shall turn it to as many of the sun;
Nay, to a thousand, so ad infinitum [.]
（Act II. Scene I, ll. 38-42）

この「偉大なる薬」（‘the Great Medicine’）は「ひとかけらを投入しただけで」「水銀、銅、銀をそれと同等の黄金に、もしくは千倍の無限倍の黄金に」変える力をもっているという。

ここでは「偉大なる薬」と言われているが、錬金術によって得られる秘薬は「エリクシル」「石」「薬」「水銀」など、様々な呼び名を与えられる。錬金術師の立場を取るサトルが言うには、「専門家の間でもお互いにちぐはぐである」のは、「錬金の奥義を秘匿しておきたいという専門家の意図によるもの」（‘And all these named,/ Intending but one thing; which art our writers/ Used to obscure their art’, ll. Act II, Scene III, ll.197-200）である。ジョンソンの言及はパラケルススの以下の論に準じたものということができるだろう。

> The Philosophers have prefixed sundry most occult names to this matter of the stone, grounded on sundry similitudes. [. . .] they have called it Vegetable, Mineral, and animal, not according to the literal fence, as is well known to such wise men as have tried the divine secrets and miracles of the same stone. [6]

哲学者たち、即ち錬金術師たちは、さまざまなオカルトの名をつけてきた。哲学者の石が神聖なる奥義を持っているからであることをパラケルススは示唆している。ジョンソンと同様に、先に見たトマス・ロッジもまた錬金術を「詐欺」（‘fraud’）とみなし、その父である、ベイコンやヘルメスが曖昧な言葉遣いによって、錬金術の用語を作り出したことを次のように描いている。

Bacon, and *Hermes* father of this fraud.
Began the same in termes, and word obscure,
（To studious of deceit and foolish laud,）
Hoping by toyes to make their craft endure.
（‘The Anatomy of Alchemie’, ll. 69-72）

ロッジの言葉を借りれば、言葉遣いを曖昧にしようとする錬金術師たちの試みは、彼らの技をくだらない物をもってして巧みに耐えさせるものである。錬金術師たちの言葉は本質を捻じ曲げる行為でもあり、彼らの詐欺行為は言葉にまで及ぶことを暗に示している。

3．実践的錬金術の工程と実験

また、ジョンソンの描写は、実践的錬金術の工程を観客に見せるものとなっている。サトルは、召使である助手役のフェイスに学者らしく、「その（即ち錬金術の）用語で答えるように」（‘answer in the language’）といい、「実験における金属の苦悩および殉教の過程」を説明させている。

SUB. Sirrah, my varlet, stand you forth and speak to him,
Like a philosopher: answer in the language.
Name the vexations, and the martyrisations
Of metals in the work.
FACE. Sir, putrefaction,
Solution, ablution, sublimation,

Cohobation, calcination, ceration, and Fixation.
SUB. This is heathen Greek to you, now！—
And when comes vivification.
FACE. After mortification.
SUB. What's cohobation？
FACE. 'Tis the pouring on
Your aqua regis, and then drawing him off,
To the trine circle of the seven spheres.
SUB. What's the proper passion of metals？
FACE. Malleation.
SUB. What's your ultimum supplicium auri？
FACE. Antimonium.
SUB. This is heathen Greek to you！ - And what's your mercury？
FACE. A very fugitive, he will be gone, sir.
SUB. How know you him？
FACE. By his viscosity,
His oleosity, and his suscitability.
SUB. How do you sublime him？
FACE. With the calce of egg-shells,
White marble, talc.
SUB. Your magisterium now,
What's that？
FACE. Shifting, sir, your elements,
Dry into cold, cold into moist, moist into hot,
Hot into dry.
SUB. This is heathen Greek to you still！
Your lapis philosophicus？
FACE. 'Tis a stone, And not a stone; a spirit, a soul, and a body:
Which if you do dissolve, it is dissolved;
If you coagulate, it is coagulated;
If you make it to fly, it flieth.
SUB. Enough. [EXIT FACE.]
（Act II, Scene V, ll.18-45）

フェイスは「分解」、「溶解」、「洗浄」、「昇華」といった錬金術の工程を述べる。ここでは「金」を「再生」するためには「死して変質する」必要があることが示され、更に、金属の「被鍛性」が「金属特有の受難」であること、また「合金」とは「黄金に対する究極的極刑」であると語られる。そして「錬金の極意」とは「四大元素の転換」即ち「乾を冷」に、「冷を湿」に、「湿を熱」に「熱を乾」に、という変化のことであり、「賢者の石」（'lapis philosophicus'）とは「霊、心、体の三位一体」であるという。ここでは、パラケルススが『パラケルススの金属の変容』（1657）の中で示した錬金術の工程に忠実に従ったものになっている。[7] また、ここでは、水銀が「揮発性」をもち、「すぐに逃げ去ってしまうこと」が「亡命者」に喩えられ、「常に所在を変えようとする」ことが示されている。

ジョンソンの表現がパラケルススをはじめとする錬金術師たちの理論に準じていることは、また、アダム、モーゼ、ミリアム、ソロモン等が錬金術を収め、賢者の石を持っていたということは、次のような描写の中でもみることができる。

MAM. You are incredulous.
SUR. Faith I have a humour,
I would not willingly be gull'd. Your stone
Cannot transmute me.
MAM. Pertinax, [my] Surly,
Will you believe antiquity？ records？
I'll shew you a book where Moses and his sister,
And Solomon have written of the art;
Ay, and a treatise penn'd by Adam—
SUR. How！
MAM. Of the philosopher's stone, and in High Dutch.
SUR. Did Adam write, sir, in High Dutch？
MAM. He did;
Which proves it was the primitive tongue.
SUR. What paper？
MAM. On cedar board.
SUR. O that, indeed, they say,
Will last 'gainst worms.
（Act II, Scene I, ll.77-88）

ここでは、アダムが錬金術の論文を「ヒマラヤ杉の板」（'cedar board'）に書いたという説をマモンが信じている設定になっている。[8] パラケルススは論文『パラケルススの賢者の暁と秘宝』を「賢者の石の起源」（'Of the Origin of the Philosophick Stone'）の章で始め、堕落以前のすべての物事についての知識を持っていたという点で、アダムは万物の法則の発明家であることを論じている。

Adam was the first Inventor of Arts, because he had the knowledge of all things, as well after the fall as before the fall, from thence he presaged the worlds destruction by water; Hence also it came to pass that his Successors erected two tables of stone, in the which they ingraved all Natural Arts, and that in Hieroglyphical Characters, that so their Successors might also know this presage, that it might be heeded, and provision or care made in time of danger. Afterwards, Noah found one of the tables in Armenia under the Mount *Araroth*, when the deludge was over.（pp.1-2）

錬金術師たちは、失楽園以前のアダムの状態に回帰することが錬金術の目的の一つとしていたため、錬金術師たちはアダムが初めの錬金術師であるという論を唱えている。聖書のエピソードの中に錬金術の理論を見出そうとする様子は、ダンの「幾人かの人は聖書のなかに錬金術を見出す（'in the Bible some can find out alchemy',

‘Valediction: Of the Book’, l. 54）」という描写や、ジョージ・ハーバート（George Herbert, 1593-1633）の神の力のなかに錬金術を見出そうとする描写からも見てとることができる。ヘンリー・ヴォーンも「聖文」（‘Holy Scriptures’）と題された詩の中で「聖文」は「偉大なるエリクシル」であると述べている。

In thee the hidden stone, the *Manna* lies,
Thou art the great *Elixir*, rare, and Choice;
The Key that opens to all Mysteries,
The *Word* in Characters, God in the *Voice*.（ll.5-8）

清教徒革命後の王党派詩人のヴォーンにとって、神の声を聴くことを可能にするのは、「聖文」というエリクシルのみである。[9] 真の信仰心をもってして、神の力を理解したり、神の声を聞こうとするヴォーンの表現と比較した場合、錬金術に関わるジョンソンの描写はあくまで、「賢者の石」の知識を見出すためのものとなっており、錬金術に携わる人々が、聖書の解釈を捻じ曲げる一因になったことを浮き彫りにするものと読むこともできるだろう。

4.「エリクシル」の効果ー若返りと伝染病の治療

賢者の石およびエリクシルは長寿をもたらすと考えられていたが、『錬金術師』の中では、「若返り」の力を持つことがマモンによって観客に提示される。

MAM.
. . . I assure you,
He that has once the flower of the sun,
The perfect ruby, which we call elixir,
Not only can do that, but, by its virtue,
Can confer honour, love, respect, long life;
Give safety, valour, yea, and victory,
To whom he will. In eight and twenty days,
I’ll make an old man of fourscore, a child.
SUR. No doubt; he’s that already.
MAM. Nay, I mean,
Restore his years, renew him, like an eagle,
To the fifth age; make him get sons and daughters,
Young giants; as our philosophers have done,
The ancient patriarchs, afore the flood,
But taking, once a week, on a knife’s point,
The quantity of a grain of mustard of it;
Become stout Marses, and beget young Cupids.
（Act II, Scene I, ll. 45-62）

ここでは「ノアの洪水以前の父親」たちが長寿であったのは、「錬金術の秘法」を心得ていたためであり、錬金の技をもち、賢者の石を「ナイフの先で試み」れば、「八十歳の老人を子供に返らせる」ような技ですら、なし得るとマモンは主張する。この若返りの効用とともに錬金術によって得られる秘薬の効果が示されているのが、ペストをはじめとする伝染病の治療である。

MAM. ’Tis the secret
Of nature naturis’d ’gainst all infections,
Cures all diseases coming of all causes;
A month’s grief in a day, a year’s in twelve;
And, of what age soever, in a month:
Past all the doses of your drugging doctors.
I’ll undertake, withal, to fright the plague
Out of the kingdom in three months.
SUR. And I’ll
Be bound, the players shall sing your praises, then,
Without their poets.
MAM. Sir, I’ll do’t. Mean time,
I’ll give away so much unto my man,
Shall serve the whole city, with preservative
Weekly; each house his dose [.]
（Act II, scene I, ll.63-75）

ジョンソンは、パラケルススの説いた、賢者の石が「伝染病を治療する」（‘cure the plague’）効果をもつという理論を下敷きにしている（Paracelsus, 1659, pp.91-92）。ここで語られている‘house’とは、一義的には「家」もしくは「館」の意であるが、‘house’には「劇場」（*OED*, 4 g, ‘A theatre, Playhouse’）の意も含まれる。すなわち、「ひとつの劇場にそれぞれ一つの薬を」ということになる。その各一包で金銭を一儲けしようと、マモンが企んでいる。そもそもこの戯曲は、ペストの流行で逃げ出した主人、ラブウィット（Lovewit）の留守中に、サトルがその館を乗っ取ったかたちで錬金術を行うという設定になっている。ここでの発言は、ペストという流行り病を利用し、一人の召使であるサトルが主人不在の館を一種の劇場と化していること、さらに言えば、エリクシルというペストの特効薬を売りつけることで、マモンのように、荒稼ぎをしようと試みている連中がいることを観客に再確認させるものとなっている。加えて、ロンドンの劇場がペストの流行期間中閉鎖されていたことを考慮すると、ジョンソンは、錬金術によって取り出される薬がペストを治療すると信じていると考えることができる。

5.悪魔の錬金術

第三幕一場では、錬金術師サトルに対して不信感を抱くアナナイアスが、牧師トリビュレーション・ウォールサムに対し、「彼はカナンの言葉を話す異端者なのです」（‘he is a heathen,/And speaks the language of Canaan speaks the language of Canaan, truly’, l. 5-6）といい、加えて、サトルの「額には野獣の印がある」（‘The visible mark of the beast in his forehead’, l.8）こと、「彼の石は地獄の実験である」（‘his stone, it is a work of darkness’, l. 9）こと、さらには、錬金術が「哲学をも

って、世の人々の眼を盲目にさせていること」（‘with philosophy blinds the eyes of man’, l. 11）を訴える。[10]

このアナナイアスの主張に対し、トリビュレーションは、サトルが「異教の輩であると思っている」にもかかわらず、「聖なる目的を邁進するものであれば、/ たとえ身を屈してもあらゆる手段に赴かねばならない」（‘we must bend unto all means, / That may give furtherance to the holy cause’, ll. 11-12）と述べて、目的は手段を正当化すると主張する。アナナイアスは「聖なる目的のためには神聖なる手段を選ぶ必要がある」（‘the sanctified cause / Should have a sanctified course’, ll. 12-13）と反論するも、勢力を拡大したいトリビュレーションは、地獄の実験である錬金術を行っているサトルは一時的に異端者になってはいるが、実験を終えればトリビュレーションらの宗派の信者になることを次のように述べる。

TRI.
The children of perdition are oft-times
Made instruments even of the greatest works:
Beside, we should give somewhat to man’s nature,
The place he lives in, still about the fire,
And fume of metals, that intoxicate
The brain of man, and make him prone to passion.
Where have you greater atheists than your cooks ?
Or more profane, or choleric, than your glass-men ?
More antichristian than your bell-founders ?
What makes the devil so devilish, I would ask you,
Satan, our common enemy, but his being
Perpetually about the fire, and boiling
Brimstone and arsenic ?
（Act III, Scene I, ll.16-27）

ここでのトリビュレーションの理論は、かつては天使であったサタンが悪魔になった原因は、絶えず「火のかたわら」にあって「硫黄」と「砒素」を燃やしていたことによるものだというものである。それと同じように「料理人」（‘cooks’）が不信心であること、「ガラス職人」（‘glass-man’）が怒りっぽいこと、「鐘造り職人」（‘bell-founders’）が神を罵る敵であることなど、すべてが「絶えず火や煙のそばで暮らして」いることが原因であると述べる。トリビュレーションの言葉を借りれば、彼らはそのせいで「脳が毒され、激情にかられやすくなる」。従って、錬金術師サトルという「地獄の子」（‘The children of perdition’）が賢者の石を完成させれば、「偉大な仕事の媒介者」（‘instruments [. . .] of the greatest works’）になるとトリビュレーションは信じており、次のようにも述べている。

We must give, I say,
Unto the motives, and the stirrers up
Of humours in the blood. It may be so,
When as the work is done, the stone is made,
This heat of his may turn into a zeal,
And stand up for the beauteous discipline,
Against the menstruous cloth and rag of Rome.
We must await his calling, and the coming
Of the good spirit. You did fault, t’upbraid him
With the brethren’s blessing of Heidelberg, weighing
What need we have to hasten on the work,
For the restoring of the silenced saints,
Which ne’er will be, but by the philosopher’s stone.
And so a learned elder, one of Scotland,
Assured me; aurum potabile being
The only med’cine, for the civil magistrate,
T’incline him to a feeling of the cause;
And must be daily used in the disease.
ANA. I have not edified more, truly, by man;
Not since the beautiful light first shone on me:
And I am sad my zeal hath so offended.
（Act III, Scene I, ll. 34-47）

賢者の石を手に入れて布教活動を行おうと目論んでいるトリビュレーションは「理不尽な沈黙を強いられている聖者たち」に対し、「飲用黄金が/唯一の薬になる」（‘aurum potabile being/ The only med’cine’）と考えている。ここでは、非国教派の牧師たちが破門され、英国内での説教を禁じられたこと、清教徒の一派のトリビュレーションが、錬金術の可能性を信じていたことが示されている。

6 . 宗教的熱狂と錬金術

トリビュレーションはアナナイアスを説得して賢者の石を手に入れるために、錬金術師サトルが石を完成させた暁にはその「熱意」（‘zeal’）が神へと向かってゆくと述べる。ここでの「熱意」（‘zeal’）とは、アナナイアス自身が「純粋なる熱狂」（‘pure zeal’, l.4）からして「異端者」であるサトルが我慢できないと述べていたものと同質のものである。アナナイアスが用いている「宗教的熱狂」（‘zeal’）とは、清教徒が霊感を受けて革命を推し進める際に用いた語であるが、トリビュレーションがいうところの「熱意」は錬金術師サトルが賢者の石に向けている情熱を意味する。ここでは同じ‘zeal’という単語が、「宗教的熱狂」と、熱心に賢者の石を追い求める様子の二つの意味で使われている。換言すれば、賢者の石を探究する熱心さと、「宗教的熱狂」は同質のものであると、ジョンソンは暗に示していると考えられる。[11]

そして、第三幕二場では、錬金術師サトルが、「連結炉」と「循環塔型炉」の火はとっくに消え、「蒸留器やフラスコ、レトルトやペリカンのほうもすっかり灰になっている」と言って賢者の石が完成したことを仄めかす。

SUB. O, are you come ? ’twas time. Your threescore minutes
Were at last thread, you see: and down had gone

Furnus acediae, turris circulatorius:
Lembec, bolt's-head, retort and pelican
Had all been cinders.—Wicked Ananias !
Art thou return'd ? nay then, it goes down yet.
TRI. Sir, be appeased; he is come to humble
Himself in spirit, and to ask your patience,
If too much zeal hath carried him aside
From the due path.
(Act III, Scene II, ll. 1-9)

アナナイアスに嫌悪感を示すサトルに対し、トリビュレーションはアナナイアスが「心からお詫びをしよう」とやってきたのであって、「もし彼が踏むべき道を踏み外したのであれば、それは有り余るほどの熱心さによるのもの」であると、錬金術師サトルに説明をする。

SUB. Why, this doth qualify !
TRI. The brethren had no purpose, verily,
To give you the least grievance; but are ready
To lend their willing hands to any project
The spirit and you direct.
SUB. This qualifies more !
TRI. And for the orphans' goods, let them be valued,
Or what is needful else to the holy work,
It shall be numbered; here, by me, the saints,
Throw down their purse before you.
(Act III, Scene II, ll. 34-47)

更に、サトルが「聖霊」のもとに企てた仕事に対し、「喜んで助力の手を差し伸べる準備ができている」と、また、「聖なる実験に必要な品々は何なりとお支払い」し、自分たち「聖者たち」('the saints') は錬金術に「財布を差し出す」という。ここで、錬金術師サトルと、清教徒トリビュレーションが意図する 'spirit' や 'zeal' はその意味する所において異なることに観客は気付かされるだろう。サトルが言うところの 'spirit' とは錬金術用語の「蒸留液」を意味する。だが、トリビュレーションが意味するのは、清教徒たちが授けられていると豪語する「霊感」であり、サトルの錬金術用語も、トリビュレーションの清教徒の言葉も、体制側からすれば、本来の聖書の中の「聖霊」の意を捻じ曲げていることになる。サトルは錬金術師として、そしてトリビュレーションは新興勢力として、それぞれ、'spirit' や 'zeal' という語を本来の聖書の中の意とは異なる意味合いを付け加えている。ジョンソンの描写は、清教徒たちの誤った聖書解釈が、偽の錬金術師たちが行っている詐欺行為と変わらないことを示しているのである。言葉の意を捻じ曲げる清教徒たちも、誤った、偽の錬金術師なのである。

サトルは、次のような皮肉混じりの独白で賢者の石を手に入れようとしているアナナイアスに対する策略を観客に示す。

SUB.
[. . .] Now,
In a new tune, new gesture, but old language.
This fellow is sent from one negotiates with me
About the stone too, for the holy brethren
Of Amsterdam, the exiled saints, that hope
To raise their discipline by it. I must use him
In some strange fashion, now, to make him admire me.
(Act II, Scene IV, ll. 26-32)

ここでの「故郷をおわれた聖者たち」('the exiled saints') とは清教徒たちのことである。ジョンソンは、清教徒たちがまだ虐げられた状態であることを示し、その状態であるが故に賢者の石の力を借りることで宗教の勢力までももり立てようと試みていることを、サトルのトリビュレーションとの次のようなやり取りの中で描き出す。

SUB.
Have I discours'd so unto you of our stone,
And of the good that it shall bring your cause ?
Shew'd you (beside the main of hiring forces
Abroad, drawing the Hollanders, your friends,
From the Indies, to serve you, with all their fleet)
That even the med'cinal use shall make you a faction,
And party in the realm ? As, put the case,
That some great man in state, he have the gout,
Why, you but send three drops of your elixir,
You help him straight: there you have made a friend.
(Act III, Scene II, ll.20-32)

賢者の石の治療の効果や若返りの特効を見せつけることによって、「信者をつくる」('have made a friend') とサトルはトリビュレーションを説得しようとする。

結

ジョンソンは、錬金術のマニュアルに従って錬金術師たちが実験をしている様子を描き、彼らが得ようとしている「賢者の石」もしくは「エリクシル」は、伝染病の治療や若返りの効果があると考えられていたことを提示している。ジョンソンの『錬金術師』の中では、錬金術師を利用して勢力を拡大しようと企んでいる、清教徒たちに対する批判が描かれている。 清教徒たちの「熱狂」('zeal') は、賢者の石を虚しくも追い求めている錬金術師たちの情熱と何ら変わりはない。また、自身の都合に合わせて言葉を捻じ曲げている清教徒たちの聖書解釈は、言葉の真意をあいまいにし、奥義を隠そうとする錬金術師たちと同様の行為でもある。

後編では、「宗教的熱狂」と錬金術の関係に焦点をあてながら、ヘンリー・ヴォーンの詩をみていくことにしたい。

注

1 Chaucer, *Riverside Chaucer*（Oxford：OUP, 1987）, p.274

2 William Cartwright, *The Life and Poems of William Cartwright*（Cambridge, CUP, 1918）, p.67.

3 *The Complete Works of Thomas Lodge*, pp. 66-70. この詩は、詩集 *A Fig For Momus* の中に収められ1595年に出版されている。ロッジの錬金術の表現については、Maxwell-Stuart, p.117を参照。マックススウェル＝スチュワートはベン・ジョンソンの『錬金術師』における錬金術師に対する皮肉を示した後に、戯曲以外において錬金術師が批判される例としてロッジの詩の49-56行を挙げている。マックススウェル＝スチュワートはガブリエル・プラッツ（Gabriel Plattes, c 1600-1644）のパンフレットで錬金術師たちに対する警告が行われたことにも言及している。Maxwell-Stuart, p.117：And it was against just such social oddities that Gabriel Plattes issued his warning about 50 years later in his pamphlet 'A Caveat for Alchemists, or a Warning to all ingenious Gentlemen, whether Laicks or Clericks, that study for the finding out of the Philosophers Stone: shewing how that they need not to be cheated of their Estates, either by the perswasion of others, or by their own idle conceits.'

4 Abraham Cowley, *The Collected Works of Abraham Cowley, Volume1: Poetical Blossomes, The Puritans Lecture, The Puritan and the Papist, The Civil War*. Ed. Thomas O Calhoun,（Newark：U of Delware P）, pp.88-89. リンデンやマックススウェル＝スチュワート、ラインディはこの詩がチャールズ１世に対してささげられたものと解釈をしている。（Linden, p. Maxwell-Stuart, p.118, Lyndy, p.16）そのため、本稿では、チャールズ１世を謳ったものとしての解釈を試みている。しかし、1777年に出版された、*The Poetical Works of Abraham Cowley, Vol 1.* の中では、'In commendation of the time we live in, *King*, Charles II' と題されており、清教徒革命で断頭台に送られたチャールズ一世ではなく、王政復古を果たしたチャールズ二世の支配の下で書かれた詩と解釈されている。清教徒革命と錬金師の関係をカウリーがどのようにとらえていたか、更なる調査を試み、別稿に寄せることにしたい。

5 ジョンソンは『錬金術師』の梗概（'The Argument'）で、ローマの喜劇作家プラトゥスなどが用いたアクロスティックの手法を使っている。頭文字をつづり合わせると、THE ALCHEMISTとなる。

T he sickness hot, a master quit, for fear,
H is house in town, and left one servant there;
E ase him corrupted, and gave means to know
A Cheater, and his punk; who now brought low,
L eaving their narrow practice, were become
C ozeners at large; and only wanting some
H ouse to set up, with him they here contract,
E ach for a share, and all begin to act.
M uch company they draw, and much abuse,
I n casting figures, telling fortunes, news,
S elling of flies, flat bawdry with the stone,
T ill it, and they, and all in fume are gone.

また、ジョンソンは、登場人物にそれぞれ意味を持たせ、名前を付けている。「サトル」（Subtle）は「ずる賢い男」、「サー・エピキュア・マモン」は「快楽主義者」と「物欲、拝金」すなわち「快楽と背筋の徒」を意味する。ジョンソンは狂信的な清教徒の一派に属する牧師には、「困難」の意を含む、「トリビュレーション」の名をつけ、また彼に使える牧師を「アナナイアス」という名を与えている。アナナイアスは「使徒列伝」第５章、11-12節で、妻と共謀して自身の財産をごまかそうとした、アナナイアスの名からとったものと考えられている。これは、当時の清教徒たちが、人間が原罪を背負っている以上、聖書の中の罪びとの名を子供に命名するのを当然であると考えていた思想を反映している。登場人物の名については、Adams, p.176、ジョンソンの『錬金術師』における錬金術思想についてはLinden, pp.118-131を参照。

6 Paracelsus, *Paracelsus His Aurora and Treasure of the Philosophers*（1659）, p.14.

7 *Ibid*, p.41：The spirits are fugitive, so long as the bodies are mingled with them, and strive to resist the fire and his flame：and yet these parts can hardly agree without a good operation and continuall labour：for the nature of the soul is to ascend upward, where as the center of the soul is.

8 パラケルススが錬金術の理論を発表したのは、高地ドイツ語であり、ここではパラケルススの理論がアダムの錬金術を示唆するものとして言及されている。またロジャー・ベイコンはヘルメスの奥義は、墓石に書かれていると論じている。Bacon, p.16：'The Wordes of secrets of *Hermes*, which were written in a Samaragdine Table, and found betweene his hands in an obscure vaute, wherein his body lay buried.'

9 ヴォーンは、宗教もしくは信仰心が、命に真の「ティンクチャ―」を与え、不死の存在にすることを述べている、ヴォーンもまた、一種の「エリクシル」になることを述べている。Works, p. 308：'That death, whose leaders are Integrity and virtue, whose cause is Religion is the Elixir which gives this life its true tincture, and makes it immortal.'

[10] アナナイアスが「カナンの言葉を話す異端者」と主張している背景については *Ben Jonson's Plays and Masques*（Ed. Robert M Adams), p.218: As a consequence of their addition to the prophecies in the Bookof Revelation, the Puritans sought in their enemies the mark of that "beast" who they thought stood in the way of Christ's second coming' を参照。

[11] この「宗教的熱狂」は、ジョンソンの時代の清教徒たちが自分たちの熱心さを訴えるために肯定的に使った用語であるが、宗教戦争後には、革命を起こし、チャールズ一世の処刑に持ち込んだ清教徒たちの過激さを王党派詩人たちが批判する用語となった。'zeal' の概念と錬金術の関係については後編で述べることにしたい。

参考文献

Bacon, Roger. *The Mirror of Alchemy*. London, 1597.

Carew, Thomas. *Poems, Songs and Sonnets, Together with a Masque*. London, 1671.

Cartwright, William. *The Life and Poems of William Cartwright*. Cambridge: CUP, 1918.

Carew, Thomas. *Poems, Songs and Sonnets, Together with a Masque*. London, 1671.

Cowley, Abraham, *The Poetical Works of Abraham Cowley, Vol 1*. Edinburg, 1777.

---. *The Collected Works of Abraham Cowley, Volume 1: Poetical Blossomes, The Puritans Lecture, The Puritan and the Papist, The Civil War*. Ed. Thomas O Calhoun, Newark: U of Delware P, 1989.

Donne, John. *The Complete Poems of John Donne*. Ed. Robin Robins. Longman, 2008.

Herbert, George. *The Complete English Works*. Ed. A. P. Slater. New York: Knopf, 1995.

Hill, Christopher. *The World Turned Upside Down: Radical Ideas during the English Revolution*. New York: Viking, 1972.

The Holy Bible: Kings James Version. Oxford, OUP, 1996.

Husain, Itart. *The Mystical Element in the Metaphysical Poets of the Seventeenth Century*. London, 1948.

Jonson, Ben. *Ben Jonson's Plays and Masques*. Ed. Robert M Adams. London: Norton, 1979

Linden, S. J. *Darke Hierogliphicks*. Lexington: Kentucky UP, 1996.

---. *Mystical Metal of Gold*. New York: AMS, 2007.

---. *The Alchemy Reader: From Hermes Trismegistus to Isac Newton*. Cambridge: CUP, 2003.

---. *Mystical Metal of Gold*. New York: AMS, 2007.

Lodge, Thomas. *The Complete Works of Thomas Lodge: Now First Collected. Vol.3*, 1883.

Lyndy, Abraham. *Marvell&Alchemy*. Aldershot: Scholoar Press. 1990.

Marvell Andrew. *Poems of Andrew Marvell*. Ed. Nigel Smith, revised. 2003; Harlow, 2007.

Maxwell-Stuart.P.G.*The Chemical Choir*. London: Continuum, 2008

Milton, John. *Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. London: Longman, 2006.

Nollius, Heinrich. *Hermetic Physick: Englished by Henry Uaughan, Gent*. London, 1655.

Paracelsus, Theophrastus. *Paracelsus His Aurora and Treasure of the Philosophers*. London, 1659.

---. *Paracelsus His Archidoxes Comprised in Ten Books*. Ed. John Hester. London, 1661.

Roberts, Gareth. *The Mirror of Alchemy*. London: British Library, 1994.

Rudrum, Alan. '"These fragments I have shored against my ruins": Henry Vaughan, Alchemical Philosophy, and the Great Rebelion' *Mystical Metal of Gold: Essays on Alchemy and Renaissance Culture*. Ed.Stanton J. Linden. Ed. Brooklyn: AMS, 2007.

Vaughan, Henry. *Silex Scintillans*. London, 1650, 1655.

---. *Mount of Olieves. London*, 1652.

---. *The Works of Henry Vaughan*. 2nd ed. Ed. L.C. Martin. Oxford: Clarendon Press, 1957.

---. *The Complete Poems of Henry Vaughan*. Ed. Alan Rudrum. Harmondsworth: Penguin, 1977.

Vaughan, Thomas. *The Fame and Confession of the Fraternity of R: C*. London, 1651.

---. *The Marrow of Alchemy*. London, 1654.

Yates, Francies. *The Rosicruician Enlightment*. London: Routledge, 2001.

Yoshinaka, Takashi. *Marvell's Ambivalence: Religion and the Politics of Imagination in Mid-Seventeenth Century England*. Cambridge: Brewer, 2011.